

Topics

かぶらき きよかた

「鏗木清方と江戸の風情」

新収蔵作品展「七つ星-近年の収蔵作家たち-」



館長のつれづれだより ～美術館の主役は、あなたです～



「美術館の主役は、あなたです」と唐突に言われても、「？」と困惑される方もおられるでしょう。「当然だ。美術館は、そもそも市民のためのものなんだから」とおっしゃる方もおられるに違いありません。わかっているようで、その答えはなかなか解かり難いといえるかも知れません。

「美術館を活用するのは、楽しむのは、あなたです」と言えば少しは、解かり易いかもしれません。では、レストランの主役は誰でしょう。料理を作るシェフでしょうか？ それとも、料理人の作った料理を食べて、「美味しい」と満足し、その食事を楽しむことが出来たあなたでしょうか？ 百貨店の主役は？ 「お客様は、神様です」と言い放った、有名な歌手がいたことを記憶される方もおられるでしょう。

このように考えると、美術館の主役は、展覧会を企画したり、その計画に従って美術作品を展示したり、そのための調査や研究を行って、論文や作品の解説文を書いたりする、学芸員ではなさそうです。レストランのシェフが料理のレシピを考えたり、百貨店の店員が、お客の満足する商品の品揃えをするために、いろいろと研究、すなわち市場調査したりするのと、学芸員のする仕事との間に大きな違いはないのではないのでしょうか。

ともすると学芸員のしていることというのは、普通の人には理解しにくい、自分の趣味や好きなことをするために美術館を使っている、あるいは利用していると言われることがあります。学芸員たちは、仕事の上で専門的な領域をそれぞれに持っています。そこで得ることが出来た経験や知識を生かし、彼らに担わされている「社会教育」の責めを果たすために美術館業務の一端として研究や教育的な活動をすることもあります。しかし、前述のことから皆さんもお解りのように、個人的な利を得ることを求めて学芸員たちが、特別なことをしている訳ではむしろありません。

美術館に関係する者は、皆一様に美術に関心をもち、やや大げさに言えば、美術に対しての「愛」を持っています。「美術が好き」と言い換えても良いでしょうか。その意味で学芸員は、好きなことを職務として懸命に行おうと努力する幸せな人と言えます。

「美術が解かる」、「美術を理解する」にはどうすれば良いでしょうかという質問を、しばしば受けることがあります。そんなときわたしは、美術、または美術品と呼ばれるようなものに出会ったら、あるいは美術館に入ってしまったら、まずあなたご自身が気に入る作品を見つけてください。気に入ったものに出会うことが出来なかつたら、あれこれ考えずにその場を去ることです。たとえ美術が理解出来なくても、ただ生きて行く上では、そんなに大きな問題ではありません。無理に美術に触れる機会を持たなくて良いでしょう。

けれどももし美術に関心があったり、幾許かの興味をまだあなたが持っているなら、美術を見ること、触れる機会を重ねることでしょう。そうすれば必ず自分の気に入る作品、興味を持てる好きな美術に出会うはずです。一つ好きな美術が出来たら、それからは美術

に出会う回数が増えますごとに、次々と好きなもの、興味を持てる美術の数は増え、あるいは嫌いだというのも出てくると思います。そうすればあなたには、もう美術が解ったのです。あなたは立派な美術の理解者なのです。まずは興味を持つことでしょう。しかし、これは美術に限ったことではないでしょう。どんな仕事でも同じだと思います。その仕事に対する人の関心や興味の持ち方、向き合い方によって効率は高下するでしょうし、成功の左右もそこに求められるのかと思います。

千葉市美術館では、9月9日(火)から「鏗木清方と江戸の風情」展を開催します。企画の意図については、本誌に載る担当学芸員の記事をご参照頂ければ幸いです。清方の代表作に「築地明石町」(1927年第八回帝展出品)という作品があります。じつは今回の企画の目玉としようとお手配を尽くしましたが、所蔵先が不明で、残念ながら借用して展示することが叶いませんでした。次の機会を期したいと念じています。

ところで、いま、NHKの朝の連続ドラマ「花子とアン」が放送中です。ラジオのおばさんと呼ばれている主人公の花子の姿(8月中旬～下旬に放送)が、「築地明石町」と題された図に描かれている立ち姿の女性とわたしには重なります。江戸の風情を残す明治の東京に郷愁を感じつつ、いま生きるモダンな世界、清方はそれを表現しようとしています。

名作とは、実際には会ったこと、見たことも行ったこともない、人や風景に接したとき、どこか懐かしい、もしかしたら見たり会ったりした事があるのではといった思いを抱かせるような作品を指すのだというのを聞いたことがあります。TVの花子の姿を見て、清方の「築地明石町」を思い出す。「築地明石町」を通して、あるいは清方の絵画に接することで、生きてもいない明治の面影をわたしたちは体験することが出来るのです。名品には、美術にはそのような力があります。

《「いま」と「ここ」しか眼中にないひとは、教養人とはいえないだろう。過ぎ去った時代や遠い社会に想像力をめぐらせる遠心力のあるひとが教養人のはずである》と社会学者の竹内洋氏はいいます。

美術館には、あなたの想像力をめぐらすことの出来る材料が、いつも沢山用意されています。美術館をどんどん活用してください。

「美術館の主役は、あなたです」から。

[館長 河合正朝]

鏗木清方《築地明石町》(下絵) 昭和2(1927)年
鏗木清方記念美術館蔵



鏗木清方

かぶらき きよかた

江戸の風情

鏗木清方と聞けば思い出される、清艶にして典雅な美人画。あるいはかつての日本にあった、つましくも床しい庶民の暮らしを描く風俗画。画家の苦闘の跡などみじんも見せない、完成度の高い磨かれたものですが、清方といえども、はじめから独自の造形を手にしていただけではありません。清方の画風がいかにして確立されたかを考える時、そのヒントのひとつとなるのが江戸の浮世絵であり、清方が生まれ育った東京下町に残る江戸の風情でした。この展覧会は、鏗木清方の仕事を「江戸」という切り口から眺め、時に当館の所蔵する江戸期の作品とあわせて展示し、清方にとっての江戸を考えようとするものです。展示構成は、挿絵画家として出発するまでにふれていた絵の数々を序章で確認し、1章で江戸への視線を軸に画業をたどり、2章では清方と江戸をめぐる三つの主題を設定します。それでは展示の流れに沿って、本展をごく簡単にご紹介しましょう。

■序章 清方を育てた絵・清方が学んだ絵

清方は本名鏗木健一、明治11年(1878)に東京の神田佐久間町に生まれました。13歳で浮世絵師月岡芳年の弟子である水野年方に師事、挿絵画家としての修業を始めます。「清方」の号を受けて明治26年の頃からコマ絵や挿絵を発表するようになり、やがて頭角を現して挿絵界の花形となってゆきます。

本章は、清方による若描き1点を除き、清方以外の絵師による作品から構成されます。父・^{じょうのさいぎく}條野採菊が創刊し、清方デビューの舞

台となった『やまと新聞』の周辺や、幼い頃に親しんだ絵双紙の類、師・年方をはじめとする同時代の絵師たちの挿絵などです。清方は幕末の動乱の記憶もいまだ生々しい東京の下町に生まれ、浮世絵師の末裔として筆を起こし、新旧と東西の混然とするなかで自身の絵を模索しました。年方から受け継いだ芳年の、リアルだけれども時に騒々しい筆法からいかにして脱し、独自の静謐な作風を得てゆくかを観察するために、まずは若き清方が身近にふれていた絵の数々をご覧ください。



鏗木清方『やまと新聞』2718号附録「熊野靈験権兵衛」第3編挿絵
明治28(1895)年 リッケンコレクション



鈴木春信『絵本 千代松』中より 池五月雨 明治4(1767)年 千葉市美術館

■一章 清方の画業をたどる—江戸へのまなざしから—

本章では、清方の江戸へのまなざしに注目しながらその画業をたどります。清方は明治30年(1897)頃に挿絵画家として独り立ちし、心酔する泉鏡花のイメージなどから艶やかな美人像を創りあげて人気作家となりました。けれどもそれにあきたらず、明治40年前後に本画家を志します。自身の造形を探すなかで出会ったのが浮世絵、それも師系とは違う、明和～天明期を中心とする浮世絵世界でした。清方は勝川春章や鈴木春信の描く典雅な美女に傾



鏗木清方『霽れゆく村雨』(下絵) 大正4(1915)年 鎌倉市鏗木清方記念美術館蔵



鎌木清方《花見幕》
昭和13(1938)年頃 島根県立石見美術館蔵

■第二章 清方と江戸をめぐる三題

本章では、清方にとっての江戸を考えるために三つのテーマを設定します。第一のテーマは清方作品における「物語」。清方は幼時より読書を好み、挿絵から離れてからも文字の世界は常に身近にあり、制作の源となりました。文字が喚起するイメージは小画面の連作というスタイルに実を結び、清方はそれを展覧会芸術に伍しうる「卓上芸術」として提唱しました。文字とともにある絵—絵巻や絵草紙の流れをひく形式に、清方は生涯執着したのです。

第二節では、清方のいう「理想境」としての江戸に改めて光をあて、風情の通う江戸期の作例とともに観察します。新旧の作品をあわせて見るならば、清方が追慕し、自作に引用したのが浮世絵美人の姿や風俗だけではないことがわかります。清方は祖母や父を介して身内に流れる同じ江戸人の血で、めぐる季節や古い土地への江戸人の情に共感し、その共感を彼女たちに託して描いたと言えるでしょう。

第三節では「理想境」としての明治を考えます。清方が江戸の浮世絵とともに制作の縁としたのは、いまだ江戸風情の残る、青年期までを過ごした明治20～30年頃の東京下町でした。明治の庶民

倒し、自らの作品に取り込むなかで腕を磨き、文展で入賞・受賞を重ねる実力派へと成長してゆきます。

挿絵の小画面から展覧会用の大画面へと飛躍し、高評も得た大正期半ば以降、清方は再び己の天性を見つめます。生まれ育った下町の景観を一変させた関東大震災を経て、真に描きたいのは大作よりもむしろささやかな画面であり、しみじみとした情感であると自覚するのです。人物は自然の情趣や季節の情緒とともに、あるいはその化身として現れるようになり、昭和に入ると自身の幼時—江戸の風情の色濃く残る明治を回顧する視点が加わりました。太平洋戦争ののち懐旧の情はさらに募って、晩年は往時の庶民生活が作画の主調となりました。

生活は昭和初年から意識的に描かれてとりわけ戦後に多く、晩年の制作の主調となります。いうまでもなく、関東大震災と太平洋戦争という二度の災禍により、清方が愛した風景はすでに跡形もありません。明治回顧は年を経るほどに幻想の風を運び、夢にさえ傾きますが、それは「今」への静かな、しかし激しい反論だったように思います。

鎌木清方はしばしば美人画家と呼ばれます。けれどもその画業をつぶさに見るならば、美人画家という肩書ではこぼれ落ちるものが多いとわかります。清方は美人の彼方に、江戸から明治にかけて庶民が大切にしてきた季節の風情を、土地への愛着を描きました。それは単なる想像ではなく、自らを「江戸人」と称した彼の実感でもありました。清方のなかで古人は今に生き、清方は江戸にも生きている一。この稀有な時間感覚こそが清方の独創性であり、魅力ではないでしょうか。その一端を、本展でご覧いただければ幸いです。

[主任学芸員 西山純子]



鎌木清方《にこりえ》より
昭和9(1934)年 鎌倉市鎌木清方記念美術館蔵



鎌木清方《朝夕安居》より
昭和23年(1948)年 鎌倉市鎌木清方記念美術館蔵

関連イベント

■講演会「浮世絵末流 鎗木清方」

講師：小林忠(岡田美術館館長)

9月27日(土)14:00より/11階講堂にて/定員150名/聴講無料

※往復ハガキによる申込制/9月17日(水)必着

※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■講演会「鎗木清方と江戸の風情」

講師：宮崎徹(鎌倉市鎗木清方記念美術館副館長・主任学芸員)

10月12日(日)14:00より/11階講堂にて/定員150名/聴講無料

※往復ハガキによる申込制/10月1日(水)必着

※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■さや堂 de 音楽會「江戸の絲芸」

出演：竹澤悦子(箏・地歌三味線)、木場大輔(胡弓)

9月15日(月・祝)14:00より/1階さや堂ホールにて/先着150名/

観覧無料

※当日12:00より1階さや堂ホール入口にて整理券を配布

■市民美術講座「鎗木清方—絵師としての出発の頃」

9月20日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料

講師：西山純子(当館主任学芸員)

鎗木清方と江戸の風情

2014年9月9日(火)▷10月19日(日)

〔休館日〕 10月6日(月)

〔観覧料〕 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード：38206)、セブンイレブン(セブンコード：

032-568)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口

(10月19日まで)にて販売

新収蔵作品展

七つ星 —近年の収蔵作家たち—

千葉市美術館は版画や日本画など長期間の展示に向かない作品を多く所蔵しています。そのため、油彩や彫刻を主とした美術館でよくある、いつも同じ場所に同じ作品がある常設展示ではなく(それはそれで懂れますが)、テーマを設定した所蔵作品展を開催しています。いろいろな切り口で所蔵作品の魅力を引き出すべく取り組んでいるところですが、なかなかテーマ展では紹介しにくい作品もあります。作品を実際に展示することによってわかることが多いので、お披露目も兼ねて新しく収集した作品を取り急ぎ展示するのが「新収蔵作品展」です。とはいえ、コレクションに加わった年度ごと、というのも機械的すぎるかと思い、近年収集した作品を作家ごとにまとめて展示することといたしました。当館では初めて展示する作品を中心に関連作品も含めて七人の作家を星に見立てて取り上げます。生年順ではなく会場の展示順にご紹介しましょう。

☆一番星 深沢幸雄(1924～)

深沢幸雄氏は1950年(昭和25)から市原市鶴舞に住み、1955年から銅版画に取り組んでこられました。近隣市にお住まいということで、千葉市美術館では収集方針1「房総ゆかりの作品」の作家として収集、顕彰に励んできたところです。戦後日本を代表する銅版画家として、収集方針2「近世近代の日本絵画・版画」

の系譜にも連なります。現在171点の作品を所蔵していますが、この点数は大量にご寄贈していただいた地元ゆかりの作家無縁寺心澄の900点余り、石井光楓の500点余り、遠藤健郎の350点余り、千葉市美術館設立の契機となった今中コレクションを含む、江戸時代の浮世絵師溪斎英泉の300点余りに次ぐものです。深沢作品は美術館がまだ開設準備室だった1991年(平成3)度の佐藤友太郎氏によるサトウ画廊コレクションの寄贈に含まれるもの、平成4年度の購入及びご本人からの寄贈、平成16年度の当館での「深沢幸雄銅版画展」を契機としたご本人による寄贈等に加えて、平成24年度に初期作品7点を収集することができました。今回の展示では、未発表作を含む新収蔵作品の他、初期作品を中心に昭和57年までに制作された70点を展示します。



(図1)深沢幸雄「骨疾E(異版)」
1955年(昭和30) 千葉市美術館蔵





☆二番星 金子周次（1909～77）

金子周次は銚子の履物屋に生まれました。小学校では後の版画家浜口陽三（1909～2000）と同級で画才を競ったといひます。情緒不安定のため美術学校への進学を断念、家業の下駄職人として働いた後、職を転々とし、銚子出身の画家明石哲三（1906～73）に出会い油彩や水彩を描くようになりました。深沢幸雄氏が銅版画を発表し始めたのと同じ1955年、金子は木版画制作を始めました。その後茂原在住の木版画家船崎光治郎（1900～87）と知り合い、船崎の主宰する「版画を作る会」に参加します。晩年の金子の生活は銚子の人々による頒布会や篆刻の依頼に支えられていました。今回展示する18点は「版画を作る会」で長年保存してこられたものです。金子の作品は同じ版木を使いながら色などを変えたものが多く一点一点異なる味わいを見せています。「夜の灯台」は1964年に棟方志功主催の日本版画院で新人賞を受賞した「春宵（夜の灯台）」とほぼ同じ犬吠埼灯台の景色を表しています。



(図2) 金子周次「夜の灯台」 千葉市美術館蔵



☆三番星 高木東扇（1918～99）

高木東扇（本名・恭男）は千葉市に生まれました。千葉師範学校卒業後、「上代様な書」を学ぶことを決意し、教員生活のかたわら、始め尾上柴舟（1876～1957）、後に日比野五鳳（1901～85）に師事しました。日展や毎日書道展で活躍し、1991年には千葉県教育委員会より文化功労者として表彰を受けています。高円宮夫妻へ書のご進講にもあたっています。今回展示する作品は第11回新日展（1968年）出品作「玉藻」、第3回改組日展（1971年）出品作「いそ波」、第32回日書展（1978）出品作「茜さす」の3点です。

☆四番星 鈴木雄吉（1923～95）

鈴木雄吉（本名・吉雄、唯旦とも）は東京下谷に生まれました。京都市立美術専門学校日本画科在学中に満州に出征し、復学して1947年頃に卒業しました。1948年12月、三上誠の推薦により前衛日本画のグループ、パンリアルに参加しています。1952年の第8回展を最後としてパンリアルを退会し、関東に戻ったようです。洋画家野村守夫（1904～79）に師事して二科展に出品したと伝えますが入選はしておらず、詳細は現在調査中です。今回展示する作品は二科展に出品していたらしい時代の作品で、シュールレアリズム風の不思議な魅力があります。



☆五番星 椿貞雄（1896～1957）

岸田劉生（1891～1923）に師事し、晩年まで写実を追求した洋画家椿貞雄は、1926年に千葉県船橋尋常高等小学校の代用教員として採用され、その船橋市内に住みました。息を引き取った千葉医科大学（現在の千葉大学医学部）附属病院は千葉市美術館から歩いて10分位のところ。収集方針1「房総ゆかりの作品」の重要作家として千葉市美術館では開館前から収集に努めてきました。今回は作家が手元に持っていた岸田劉生の素描も合わせて展示します。



(図3) 椿貞雄「冬瓜図」昭和20-32年(1945-57)頃 千葉市美術館蔵

☆六番星 高田柳哉（1926～2013）

高田柳哉（本名・信吾）は民間企業に勤務しながら漆芸品の制作を続けました。千葉市に長く住んだことから、収集方針1「房総ゆかりの作品」としてご本人から平成20年度、24年度に寄贈を受けました。今回は二回に渡る寄贈作品をまとめて展示します。



(図4) 高田柳哉「中次 夢幻」昭和55年(1980) 千葉市美術館蔵



(図5) 高田柳哉「胎陶金地 四弁花文壺」平成5年(1993) 千葉市美術館蔵



☆七番星 岡本秋暉（1807～62）

岡本秋暉は江戸時代後期、小田原藩士として江戸中屋敷に勤めつつ、花鳥、特に孔雀を得意とする絵師として活動しました。弘



(図6) 岡本秋暉「四時群禽群芳図」 嘉永6年(1853)
公益財団法人摘水軒記念文化振興財団蔵(千葉市美術館寄託)



(図7) 岡本秋暉「銀島白鷹図」
嘉永7年(1854)
公益財団法人摘水軒記念文化振興財団蔵
(千葉市美術館寄託)



化3年(1846)頃には下総柏村(現在の千葉県柏市)の名主寺嶋家すなわち「摘翠軒」に滞在して作品を残しています。「摘翠軒」をルーツとする公益財団法人摘水軒記念文化振興財団では積極的に秋暉作品の収集を進めており、千葉市美術館にも多くの作品を寄託していただいています。今回は平成25年度に寄託された「四時群禽群芳図」、「銀島白鷹図」、「諸名家画帖」を中心に、制作年代のわかる作品や関連が伺える作品を展示します。

それぞれに異なる輝きを放つ七つ星からお気に入りが見つかりましたでしょうか。収集に際しましてご協力いただきました皆様、ご所蔵者の皆様に心より感謝申し上げます。

[主任学芸員 伊藤紫織]

新収蔵作品展 七つ星—近年の収蔵作家たち—

2014年9月9日(火)▷10月19日(日)

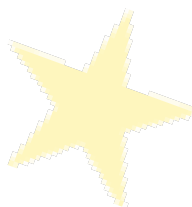
[休館日] 10月6日(月)

[観覧料] 一般200(160)円、大学生150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「鑄木清方と江戸の風情」展ご観覧の方は無料



ミュージアムショップ新商品のご案内

ミュージアムショップに、新しいグッズ「一筆飴」が登場しました！江戸時代から続く和菓子の老舗・榮太楼とコラボし、当館所蔵作品をパッケージに使っています。気になる中身は、昔ながらの「有平糖」の製法でつくられた、梅ぼ志飴、黒飴、抹茶飴が1セットに入っています。絵柄は、当館きっての優品・喜多川歌麿《納涼美人図》に、富士山世界遺産登録とともにまたブームになっている葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》、若い人にも大人気の歌川国芳《相馬の古内裏》、宝物のような漆絵が美しい柴田是真《貝図》の4種類。しかも、このパッケージの裏面を見てみると…ハガキ形式になっていて、140円切手を貼ってそのまま郵送することができます。展覧会の思い出やお誘いに、ご家族やご友人にプレゼントしてはいかがでしょうか？ご来館の際はぜひ7階のミュージアムショップにお立ち寄りください。



「一筆飴」各400円(税別)



イベント報告「美術館で縁日!!」

「江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち」展では、関連イベントとして美術館初の試み、縁日を8月17日(日)に開催しました。市内の大きなお祭り「千葉の親子三代夏祭り」が開催される日でもあり、街全体が沸き立っていました。イベントでは、花輪茶之介さんをお迎えして懐かしい飴細工の実演販売をしたり、展覧会にも出品されていた「おもちゃ絵」と呼ばれる浮世絵(コピー)を使った工作や、昔ながらの遊びである「水出し」「射的」「お手玉」「折り紙」などを体験できるコーナーを設けました。また、近隣の施設にもご協力いただき、千葉市科学館による「紙トンボ作り」、千葉市埋蔵文化財調査センターによる「泥面子作り」も行われ、子どもから大人までたくさんの方々に楽しんでいただくことができました。好評だったことから、来年も開催!という声もありますが…どうなりますか、お楽しみに！



◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2014年度下半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)

[場所] 11階講堂

[定員] 先着150名(入場無料)

○第6回	9月20日(土)	「鑑木清方—絵師としての出発の頃」 [講師] 西山純子(当館主任学芸員)
○第7回	11月29日(土)	「赤瀬川原平—千円札裁判時代の制作活動」 [講師] 水沼啓和(当館主任学芸員)
○第8回	12月13日(土)	「赤瀬川原平交友録—1960年代を中心に」 [講師] 水沼啓和(当館主任学芸員)
○第9回	1月14日(土)	「無縁寺心澄の生涯」 [講師] 藁科英也(当館学芸課長代理)
○第10回	2月21日(土)	タイトル未定(テーマ: 絵本原画展) [講師] 山根佳奈(当館学芸員)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

◎2014年度下半期展覧会のお知らせ

かぶらきよかた 鑑木清方と江戸の風情	9月9日(火)–10月19日(日)
赤瀬川原平展	10月28日(火)–12月23日(火・祝)
プラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本をめぐる世界の旅—	2015年1月4日(日)–3月1日(日)

※都合により予告なく展覧会名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。



館内では年間スケジュールを配布中です。この年間スケジュール、切り取って一筆せんとしてもお使いいただけます。ご存知でしたか？
お友達への展覧会のお誘いなどに、ぜひご利用ください！

◎編集後記

展覧会を開催していると、イベントなどであっという間に季節が過ぎてしまうのですが、今年も例にもれず「浮世絵に描かれた子どもたち」展とともに夏が終わってしまいました。そして「鑑木清方と江戸の風情」展の開催が近づいてくるとともに秋の雰囲気を感じています。チラシなどのメインイメージに使用しているのは《虫の音》という作品。清方の描く美人の儂さも秋にぴったりではないでしょうか。ぜひ美術館で秋の訪れを感じてください。

[広報 磯野 愛]



[開館時間]

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

○JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

○東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

○地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

<http://www.cma-net.jp/>

[発行日] 2014年9月9日

[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

